



比古婆衣

三

信 5
33
3



比古婆衣三の卷

天石屋

古事記天石屋段の傳トクイハヤト天石屋戸は必しを實の岩窟
 には非し信友云此傳石屋戸の戸を石屋此戸の
 事誤形多し石とはを堅固を云ふて天
 之石位天ノ石靴天磐船形の類ミテ尋常ヨソツネ殿
 戎かく云うな依信書紀小瓊々杵尊の天降坐處に
 と引開天磐戸とあるもとの川ね能殿戸をのく云里
 書紀小岩窟と何系文字と拘る信のらばと説をれ多

伴信友稿



り今按ふおは實の石屋イハヤにて尋常此殿とは別コトに在る
石窟殿なるは其は故ありて既に結ト構置キのせむへ
などのほり或説イハヤ石窓櫛石窓など此石もふお堅固なり
云るは非なる由ありはれり石は祝と云ふお堅固なり
と云は非なる由ありはれり石は祝と云ふお堅固なり
真門の義は穩なりあまら石石齋イハヤ其は神代紀に入于
石船の義は穩なりあまら石石齋イハヤ其は神代紀に入于
天石窟閉磐戸イハヤ而幽居焉一書ふを入于天石窟而閉籠
磐戸焉イハヤ居于天石窟閉其磐戸イハヤなむ以て其の傳も
とな石窟磐戸イハヤ對へ書れるるうへに上ふ天石窟
少書て閉其磐戸イハヤと其の字找さへに書れるる處はあ
はをとれたふは乃萬葉集に大汝少彦名乃將座志都

子我伊座家留三穗乃石室者云々次立常磐成石室者
今我伊座家留三穗乃石室者云々次立常磐成石室者
ある石室も石屋も石室戸とは石室の戸口なり和
名抄を説文云石窟土屋也野王堀地為窟也と云る
本文を擧て和名伊波夜と訓ふは色葉字類抄は窟
無石窟也類聚名義抄は窟訓ハヤまふ字注あり
と石窟也類聚名義抄は窟訓ハヤまふ字注あり
と石窟也類聚名義抄は窟訓ハヤまふ字注あり
瑕其瑕今猶存とあはふも戸は石なりと著けま
ば其幽居イハヤなる處は石窟なりと云るは乃のら明な
る神代紀の一書に天手力雄神待磐戸側則引開之者
の優多し神を選ひ充て磐戸を引開むる名も殊に手力
多るなり萬葉集小石戸破手力毛欲得と云るは石窟殿に幽
詞をもたしかくて世間常聞となりは石窟殿に幽

○比古波衣三

○二

居坐るよりて大御光其石窟に韜障らきて世小
照明らざりしあり。記細開天石屋戸而内告者因吾
皆闇矣何由以云々出坐之時高原及葦原中國自得
の殿より幽居坐して大之のりら大御光を止め其石窟
は地上より造構られぬる穴を掘て記小以尻久米繩
造られをるより其は知る穴を掘て記小以尻久米繩
控度其御後方白言從此内不得還入同趣ありと
あゆも尋常其殿ならむはあきり内に勿還り入
坐しそとは奏上きふはあはる信からぬものをや熟
熟にねとひ合せ奉ゆべきとにあそかくて天上小
て石屋跡事のたごえをるは記小坐天安河河上之天

石屋名伊都之尾羽張神神代紀は雄起神云々とあり
此石屋の事哉下文に逆塞上天安河之水而塞道居故
他神不得行云々とあまはあはれも尋常其家はあ
らるる石屋は傳もあまはれをり其あろ慮ふ
由ありてあまに石屋小あまりて河水伐塞港へて道
路を絶く在りあり何あありこあは大御神其御小准
ふはきまはあらざれど石屋に籠れり趣のりり
もひ合せらるるなりかくてあま天武天皇紀小朱鳥
元年正月己未十八日朝廷大舖是日御御窟殿前而倡優
等賜祿有差亦歌人等賜袍袴とるる御窟殿は天

とふとやあらむ。以ては、口やいふ言由ありてたあゆ さとまゝに此魚哉。あよし
少のふは、名吉ナヨシ。此義ふく、運歩集名。加不ナアンカリノミ。得預天孫
之饌ミラシケニ。即以口女魚タテウツラザルイハレハ。所以不進御者。此其縁也。少の古事
哉。忌々ユクユク。一みて。此を食料クヒモノ。せむるうへに。言忌コトイミ。と名吉
と呼ヨビ。かゝるゝるを。此を食料。は。出羽の秋田ハツノアキタ。ヨリヨリ。ま
少セ。名吉と書く字。土左日記元日の條に。今日は都の
音ネ。此訛シ。移シ。るあり。字。土左日記元日の條に。今日は都の
こぞに。せむやら。海ウミ。のへ。此み。の。少の。志りくめ
繩の。あより。此頭カビ。ひヒ。らぎら。ひヒ。ふと。ぞいむ。ある。
と。あ。海。を。そ。乃。か。み。あ。の。口。女。此。喉ノド。の。釣ツグ。此。を。免。ふ。痛。み
疼ヒツラ。き。ゝ。る。古。事。に。よ。り。て。元。日。よ。の。此。魚。の。頭。と。杠ヒ。谷ラ。樹キ

哉。宮門ミカド。小挿ササ。禮レ。せり。し。此。子。信。し。但。し。以。ち。ゆる。み。の。少
此。志。り。く。め。繩。は。卅。日。の。夜。此。追。儼。の。料。も。く。あ。よ。し。の
頭カビ。ひヒ。ら。ぎ。ら。年。始。の。賀。儀ホギワサ。あ。る。哉。卅。日。此。夜。より。宮門ミカド
小。を。乃。せ。る。哉。元。日。よ。見。あ。禮。せ。り。し。さ。信。を。お。も。ひ。以
て。い。む。あ。へ。海。由。少。起。あ。え。ら。り。あ。り。く。め。繩。の。あ。や
さ。と。ひ。く。ら。だ。と。も。以。ふ。は。葉。さ。た。の。刺サシ。此。人。の。身。に
觸ヒ。る。ま。は。疼。痛ヒツラ。ぐ。由。ふ。て。名。に。を。負オフ。せ。ら。る。べ。け。ま。は。口
女。此。釣ツグ。の。多。免。に。喉ノド。此。ひヒ。ら。だ。ら。る。に。よ。そ。へ。さ。る。例タマシ
ふ。て。其。は。火。々。出。見。尊。此。海。神。宮。に。幸。し。て。か。の。失。む。ぬ
ひ。し。釣。哉。得。て。上。國ウツクニ。に。還。幸カヘリ。ま。し。賀。儀ホギワサ。あ。る。信。し。隼。人

式に見えらる。隼人の威儀は須ふ。楯は鈎形。表は畫く
例あり。隼人は火酢芹命の苗裔。表は元祖の徴。鈎
形事より。辛苦らね。自伏なる。故實表せ。海
なる。法し。わが古郷の若狭國にて。童部どち他の物。表
拭いて。否々。洗うて。物。表。む。償ふ。故の針も。どせ。や。唱
世。慣る。り。乃。鈎。表。微。り。や。ひ。古。語。と。ぞ。た。あ。え。ら。る。あ
が。人。不。債。失。針。此。其。縁。也。と。あ。る。に。と。背。た。を。る。凶。語。な
ら。ぬ。神代紀に。此時。古事。によりて。隼人等。が。狗人と
ありて。宮門。表。衛。に。此。狗人の事は。下。ま。す。俳優して。仕
奉る。例。あり。由の。え。ら。る。ふ。を。れ。も。ひ。合。は。れ。し。
但し。此。論。へ。る。餘。事。ど。と。は。古。事。記。傳。十。七。卷。火。照
命。奉。仕。段。に。と。り。す。べ。て。論。ひ。注。され。り。參。勢。ふ。べ。し。

さて又。上。引。て。論。を。了。土。左。日。記。よ。ら。え。ら。る。宮門の
志。り。く。免。繩。は。追。儼。形。料。あり。む。や。以。る。ゆ。その。志。り。く
免。繩。む。く。縁。由。を。外。より。内。に。入。れ。し。と。隔。成。し。て。曳
巨。を。繩。よ。り。も。や。高。天。原。に。て。天。照。大。御。神。形。石。室。に。さ
し。隱。坐。ま。し。け。る。表。招。出。し。奉。り。て。御。後。より。そ。乃。石。室
戸。小。曳。巨。し。て。此。より。内。小。勿。か。る。り。入。ま。し。そ。や。奏。し
行。ひ。く。ら。し。神。典。に。え。ら。る。神。事。も。く。後。世。に。志。め
繩。と。い。ふ。も。あ。り。ま。す。然。以。ふ。は。言。形。約。り。ら。り。鈴
屋。翁。の。説。に。古。事。記。傳。志。り。く。免。表。は。今。以。ふ。志。め。繩
あり。志。り。ハ。藁。の。本。成。り。む。く。め。ハ。あ。免。ふ。く。藁。形。し。り

哉断去^{キリサ}をて。さかづらあき置^{オキ}たふ繩あり。書紀小端出
之繩と作^{カキ}く。此云斯梨俱梅^{シリクメ}波^ハとあるふ之知る。端
出とは断^{キラ}ざる藁のあり。出たる由にて。即後世。其志
免繩の状^{カタチ}あり。やいのれき。うのおや。さてそ哉追儼
にと乃きらる。そは陰陽寮式追儼祭文小見え。そ
意に。宮内の疫鬼を追^{ヤラ}ひ出して。帰入ら。めざる神
事形^{カタチ}る。但し追儼は唐國の風俗^{フウソク}をまねき。る神事
あづら。皇國風^{ミクニフウ}を交へられたふ。なり。祭文も唐語と皇
朝^{カド}の祝詞^{イハヒ}さほと。哉告^{ツク}は例あるも。ねまひ合を。け。か
くて此繩を神境神社に曳^{ヒキ}亘^{ヒキ}を。も。や。は其神の坐を

所小隔^{コトワ}哉ありて。邪神^{ヤミガミ}哉入ら。めざる神事^{カミコト}を。ほべき
哉。た。不浄^{ケガレ}を忌避^{イミヒク}る術^{カタ}を。みむと。むた。み心得^{ココロエ}むは。
故^{イニシ}實^{コト}に。を疎^{ウツ}る。ふ。け。し。志^{ココロ}の。ほ。小和名抄^{コワナシヨ}祭祀^{カミマツリ}具^{ツグ}に注連^{ツルネ}。
顔氏家訓^{カネノウチノケムシ}云。注連章断^{ツルネノシラサキ}師說^{シノトコト}注連^{ツルネ}之^ノ利久倍奈波^{リククベナハ}章断^{ノシラサキ}之^ノ
度^ト太知^{タチ}日本紀私記^{ニッポンキシキ}云。端出^{ハタデ}之繩^{ノヒト}讀^{ヨミ}與^ト注連同^{ツルネトナリ}と載^{シル}さ。禮
也。ほ。あ。に論^{コト}へ。ふ。神事^{カミコト}に。混^{マシ}ら。は。く。た。あ。ゆる。哉
辨^{ワカ}ふ。法^{カタ}。今其顔氏家訓^{イマカネノウチノケムシ}哉檢^{ケン}る。に。偏傍^{ヘンボウ}之書^{ノシ}。死^シ有^{アル}。歸^キ。然^{シカ}。然^{シカ}。然^{シカ}。
子孫逃竄^{シソンニゲ}莫肯^{ナクケン}在家^{ニケル}。畫^エ。符^フ。作^ス。獸^{ケモノ}。勝^{カチ}。喪^{ムシ}。出^デ。日^ヒ。門^{カド}。前^{マエ}。然^{シカ}。火^ヒ。
戶外^{カドノウチ}列^{ツラ}。灰^{ハイ}。被^ヘ。送^{ツク}。家^ノ。鬼^ノ。章断^{ノシラサキ}注連^{ツルネ}。允^{コト}。如^シ。此^ノ。比^ヒ。不^レ。近^ク。有^ル。情^{ナリ}。乃^シ。儒
雅^ヤ。罪^{ツミ}。人^ノ。彈^{ヒキ}。議^ギ。所^ノ。當^ル。加^フ。也^{ナリ}。や。え。き。り。抄^{シヨ}る。注連章断^{ツルネノシラサキ}と反^{カヘ}

さまに載シされたるは注連ツネ成ナリ主ナシとして反讀カヘリヨミすツネ次ツネ小ツネも
引せられざるあり。以シて件ツネの本文ツネに章断ツネ注連ツネ成ツネ和名
抄ツネの訓ツネにたまむは之ツネ利ツネ久ツネ倍ツネ奈波ツネヲモテ之ツネ度ツネ太智ツネ
ス。やよむツネ也。字書ツネ小章ツネ表ツネ也。注ツネ灌ツネ其ツネを喪出ツネす日。
繩ツネ成ツネ灌ツネき清ツネめて戸口ツネに曳連ツネぬて家鬼ツネの歸入ツネらむあ
少ツネを表断ツネり。獸術ツネを治ツネす。然ツネる注連ツネを書紀ツネの端出ツネ
之ツネ繩ツネも當ツネて。又章断ツネを之ツネ度ツネ太智ツネとよめ。是ツネは後戸断ツネも
て鬼成ツネ歸入ツネらむ也。後戸成断ツネの由ツネときあえて。
言章断ツネの古ツネよりて。新ツネ作ツネり。訓ツネはあらざるも
とよりの古ツネ言ツネある。注連ツネ同ツネ言ツネあがら倍ツネと梅ツネの
紀ツネの訓ツネを斯ツネ梨ツネ俱ツネ梅ツネ難ツネ波ツネとゆり同ツネ言ツネあがら倍ツネと梅ツネの

差ツネあるは然ツネはた引ツネつあら似た趣ツネなり。志ツネりふに
江家次第追難ツネ引ツネ條ツネの裏書ツネ小唐志ツネ唱ツネ十二神名ツネ次逐ツネ惡
鬼ツネ索ツネ於ツネ室中ツネ而ツネ敵ツネ疫鬼ツネ云々ツネと見え。是ツネはたが唐國ツネの
追難ツネ引ツネ文ツネ成ツネ引ツネ志ツネあせらるる。皇朝ツネよてもものせらるる
式ツネの引勘ツネふは。何ツネらば。件ツネの索ツネ於ツネ室中ツネとゆり。索ツネは。葦
索ツネよて。和名抄注連ツネの上ツネ。蔡邕ツネ獨断ツネ云。懸葦索ツネ於ツネ門戸ツネ
以ツネ禦ツネ凶也。阿之ツネ乃ツネ奈波ツネとゆり。志ツネり。其ツネののみ陰
陽家ツネよ。唐國ツネ風ツネふりて。此ツネを乃ツネを用ふる。志ツネり。あ
りけるにあちせて。注連ツネ引ツネ類ツネなりて。並ツネ載ツネら。終ツネりけ
む。あや決ツネし。志ツネり。くめ繩ツネと同物ツネなりと混ツネへ。たもふ。注

のらび。又以ふ一へ地塚トコノサカヒまゝは他人を寄せしや構ふ
海とろろあどに。志め縄ハ直ハ趣サマの古歌どをにええ
るも。自他能隔哉。あせ海よて。そ能あくるむえは。同
しかる。志し。又志め縄アテをハに志めやも。以ひて。標字
哉。當て用ふるは。其志めを延て。塚能表記シレシといふ義ココロに
て。古語に志めし野家哉。志免ねきて。あど。以ふるを。そ
の志免哉。活ハタラあして。も。以ふるを。活ハタラし。但し。志め志む
志む。あど。や。活ハタラか。し。く。以へ。海例は。以ま。見あ。ら。び。
あは。猶考ふ。活ハタラし。下。鴨。長明が。四季物語。十二月の條
み。追儼の夜は云々。以る。の。む。さ。み。もの。む。ら。だ。能。

ほあを。あやらふ家。ふも。そ。く。た。あ。ら。でも。あ。海。あ。や
なれども。あやに。大内。よ。は。あ。ふ。り。の。司。能。例。と。して
は。あ。ふ。下。川。程。り。云々。む。ら。ぎ。は。己。の。神。の。社。下鴨の撰社
比良木。社。あり。社。邊。よ。終。多。く。在。り。て。神。木。あり。と。以。屋
り。あ。ほ。此。社。の。事。を。予。が。書。著。せ。る。瀬。見。小。川。に。云。へ。り。
或。ハ。と。ぞ。ろ。が。池。能。あ。ふ。り。より。奉。ね。る。と。定。下。ね。る。古
實。あり。と。以。り。あ。く。に。以。る。能。さ。み。その。や。以。屋
る。は。當。時。既。み。い。り。一。哉。能。よ。に。代。へ。て。用。ふる。格。也。サカシ
あり。し。り。一。能。活ハタラし。さて。此。事。哉。追。儼。能。條。と。志。る。せ
海。ハ。長。明。も。下。こ。や。の。を。や。能。古。實。哉。は。と。く。も。辨。へ。知
ら。ざ。り。け。む。の。し。壺囊抄。よ。節分の夜。大豆を打事の因縁。あり。と。て。佛説。さま。ね。る。以。と。孟。浪。

○比古波衣三

。土

あるおとぎをいふ鬼の在りし中、美曾路池の端に穴あり、藍
婆惣王の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
て、其鬼の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
とす。其鬼の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
記さる。追ひ、附會、説、捨、て、そ、う、み、世、の、傍、證、と、い、は、り
し。僧行、誓、が、あ、る、き、る、書、を、り、三、年、さ、て、又、む、ら、ぎ、の、ち
に、僧行、誓、が、あ、る、き、る、書、を、り、三、年、さ、て、又、む、ら、ぎ、の、ち
おとぎをいふ鬼の在りし中、美曾路池の端に穴あり、藍
婆惣王の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
て、其鬼の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
とす。其鬼の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
記さる。追ひ、附會、説、捨、て、そ、う、み、世、の、傍、證、と、い、は、り
し。僧行、誓、が、あ、る、き、る、書、を、り、三、年、さ、て、又、む、ら、ぎ、の、ち
に、僧行、誓、が、あ、る、き、る、書、を、り、三、年、さ、て、又、む、ら、ぎ、の、ち
おとぎをいふ鬼の在りし中、美曾路池の端に穴あり、藍
婆惣王の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
て、其鬼の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
とす。其鬼の目を打つ。又、鼻とて、鬼の門にさし、由を
記さる。追ひ、附會、説、捨、て、そ、う、み、世、の、傍、證、と、い、は、り
し。僧行、誓、が、あ、る、き、る、書、を、り、三、年、さ、て、又、む、ら、ぎ、の、ち
に、僧行、誓、が、あ、る、き、る、書、を、り、三、年、さ、て、又、む、ら、ぎ、の、ち

ある門戸に挿をえ、上小論をるおとく、元日の賀儀は
儲茂大晦もの世はあや乃、春の節分は、儼ふ事と
れるに、は、ま、て、混、に、う、り、来、し、の、り、は、し、春の節分
夜、大内、よ、く、追、儼、の、豆、う、ち、せ、さ、さ、ぬ、る、あ、や、文、龜、四
年、大元、長、卿、記、よ、見、た、よ、び、り、そ、の、み、既、く、古、の、式
は、廢、れ、あ、り、か、く、て、た、を、ふ、に、今、あ、く、小、論、を、志、り、く
たり、繩、あ、よ、し、頭、む、ら、た、を、供、進、る、事、延、喜、式、な、ど、小
め、繩、あ、よ、し、頭、む、ら、た、を、供、進、る、事、延、喜、式、な、ど、小
見え、ざ、せ、ど、上、よ、引、出、る、お、や、く、四、季、物、語、小、か、よ、を
りの司は、例として、川、の、ふ、下、つ、ま、り、云、々、と、え、え、せ、
ば、古、より、掃、部、司、は、供、進、る、例、京、に、け、ぬ、を、式、よ、は、載
られ、ざ、り、は、る、り、式、よ、は、諸、司、の、供、奉、る、ら、る、け、の、科

條ナを載らるやはひるどそ乃のみ在狀アリサによりては、
省コトツだて載らざる事もありやれもちるくがあまむ。
おれもそのめぐひあはれし。

隼人の狗吠

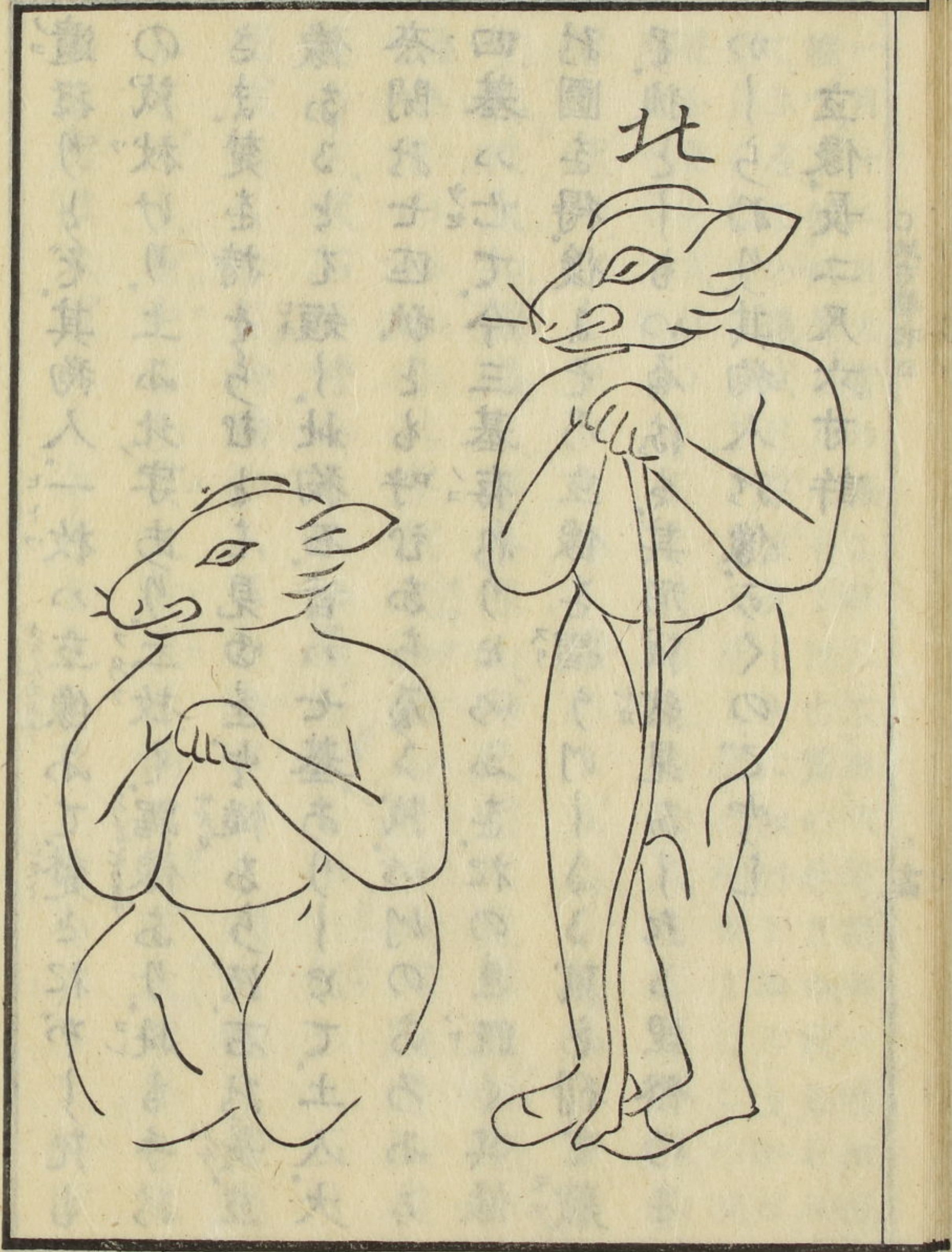
神代紀海神宮の段に火酢芥命ホスセリノの伏事シタガヒのあや城一書
云々乃伏罪曰吾已過矣ニアヤミナ從今以往吾子孫八十連屬
恒當為汝俳人ワサキヒト請哀之云々於是兄知弟有神德遂
以伏事シタガヒ其弟是以火酢芥命苗裔諸隼人等至今不離天
皇宮牆之傍モトヲカハリホエテイヌニ代吠狗而奉仕者也ツカヘツルナリと云々隼人の狗

吠の故實は隼人司式に九今來隼人令大衣習吠左發
本聲右發末聲惣大聲十遍小聲一遍訖一人更發細聲
二遍と見え其供奉事は同式に九元日即位及蕃客
入朝等儀云々今來隼人發吠聲三節蕃客入朝不在
の儀式は漢様あるが多の儀中おの發吠聲限仕奉儀
儀の似ゆかぬによりて蕃客入朝の時は傳られたり
初シ入發吠ハは九遠從駕行者官人二人史生二人率大
衣一人番上隼人四人及今來隼人十人供奉其駕經國
界及山川道路之曲今來隼人為吠ハまハ行幸經宿者隼
人發吠但近幸不吠ハあハ見えきハあハ是ハ形ハりハ長和元年
小右記十

一月廿二日大嘗の條、隼人不發、吠聲、諸卿一兩相催、
纜、吠、不、似、例、聲、と、云、え、る、は、古、實、の、尊、き、由、我、を、れ、
て、な、る、て、の、儀、式、に、嚴、重、き、に、似、川、の、ぬ、ら、恥、が、
ま、く、れ、も、む、り、あ、る、後、に、御、世、は、こ、の、吠、
聲、を、發、も、式、は、か、く、て、そ、隼、人、の、狗、人、と、云、り、て、仕、奉、
廢、も、ぞ、け、む、か、く、て、そ、隼、人、の、狗、人、と、云、り、て、仕、奉、
す、其、は、大、和、國、添、上、郡、奈、保、山、の、元、明、天、皇、の、陵、塚、と、云、
り、今、そ、の、わ、り、に、字、大、奈、閉、山、と、云、ふ、其、陵、邊、に、建、
て、し、る、犬、石、と、呼、ぶ、も、の、三、基、あ、り、之、を、自、然、あ、る、石、の、
面、平、ら、け、て、狗、頭、の、人、形、を、陰、穿、り、頭、を、狗、の、假、面、
あ、る、法、に、身、中、に、貫、れ、裝、束、て、狗、の、狀、表、せ、り、と、見、
ゆ、も、之、は、朱、成、さ、り、と、見、え、て、と、あ、る、と、剥、げ

遺、り、と、ぞ、其、狗、人、一、枚、ハ、立、像、あ、て、楚、と、托、が、り、此、も、
の、杖、け、り、上、小、北、字、あ、り、二、枚、を、踞、像、あ、り、此、も、手、の、
さ、ま、楚、を、持、せ、ら、む、と、見、ゆ、楚、慥、あ、ら、ば、石、の、長、立、
像、あ、る、と、短、し、此、狗、石、昔、ハ、七、基、あ、り、と、て、土、人、大、
奈、閉、に、七、匹、狐、と、も、呼、ぶ、あ、ら、る、杖、以、川、の、あ、る、お、の、
四、基、ハ、亡、て、今、三、基、存、れ、り、と、云、ふ、を、托、の、基、既、く、其、像、
の、圖、を、得、後、よ、そ、乃、立、像、を、摺、う、川、に、し、る、杖、を、得、て、藏、
す、狐、と、し、も、い、る、法、を、其、形、杖、然、見、あ、り、た、る、里、俗、の、さ、
か、し、ら、ぬ、り、其、狗、人、の、像、あ、く、の、ご、や、し、
立、像、長、二、尺、六、寸、許、

按ふよあは、そ乃のみ朝廷に大儀よ、隼人の狗吠して
 奉仕るときふを、狗の假面被る例ありけは、からや
 びて其像を石に摸して、陵域に殉置志えぬるもの
 あるは、今昔物語集の卅一卷に、此天皇の陵に事を以る



跡とありに石ノ鬼形共ヲ廻地邊陵ヲ墓様ニ立テ微
妙ク造レル石ナド外ニハ勝レリと云々
但一鬼形と云ふ跡ハ見たり人跡あり
聞於誤ある法きあや決してさて今遺れる立像の上小
北字あるはそののみ陵域於四面よりそれ等同一状
る城建ら終て於於方位を標したりけむ城後小東西
南於三基を亡せしむるある法く踞像も舊四基ありて
四隅に建られをりけむ二基は亡せたりあり
しそは隼人の宮墻城衛務る意ふて陵の四方四隅に
建られありしものよぞある法きあや法を昔七基あ

りけりによりて今も七匹狐といふ呼あらずるは
八基於中一基をやく亡せて七基存りし世於傳説
ある法しそもく此天皇の遺詔に陵の作りさま又
そ於陵に刻字の碑を立法きよしあや前於御世々々
よ例あき事ども城詔むねきてさせぬする事續日本
紀に見えをあち其陵碑も今も存るに唯るてれも
ひ奉るよ。續紀養老五年十月丁亥太上天皇詔云々
造竈火葬莫改他處謚號稱其國其郡朝延就山天皇流
傳後世庚寅詔曰云々卑儉是順仍立體無鑿就山天皇
之碑十二月己卯太上天皇崩于平城宮中安殿葬於大
和國添上郡猶山陵と見えたり時顯出たる刻字碑
は往年山陵の南方於崩れきたり時顯出たる刻字碑

○比古婆衣三

○夫

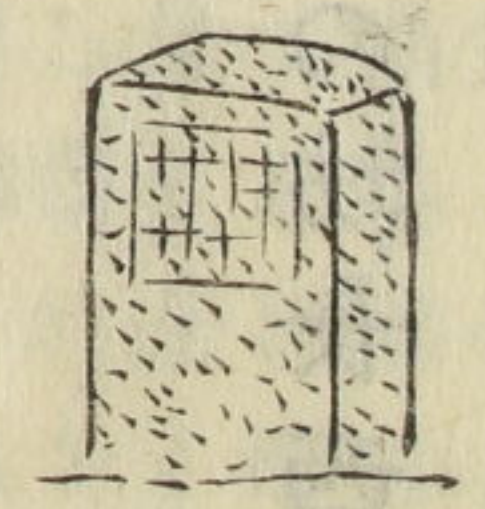
坂善城寺乃春日祠外側に移置り土人なを
姫影石と云ふに依りて其碑文を撰寫せしは
なり宮馭宇八洲太上天皇之陵是其所也養
辛酉冬十月八日癸酉朔十三日己酉葬之
一宇碑文養老五年十一月七日崩馬奈保山
尺許廣二尺許厚一尺許石形を畫し高
文代寫載せし厚一尺許石形を畫し高
己酉は續紀の要録に依りて西の
り事著しとあり其は讀み誤りて寫し
ひ事著しとあり其は讀み誤りて寫し
地續紀の今在る本推山と書たり一本
協ハ共ニ誤寫り諸陵式と保山上に引
元明天皇在大和國添上郡奈保山に
要録云々奈保山と記したるは推し
寫形も奈保山と記したるは推し
の奈保山と記したるは推し

わせり佐保と云ふ大名の地と死このゆれ
佐保山と云ふ地名に依りて西六町はかり
呼も舊の在慶地に矢田原村より西六町
の形も舊の在慶地に矢田原村より西六町
ありて土人王塚と呼ぶ其わ此犬石を遺詔
をりて字大奈閑と呼ぶ其わ此犬石を遺詔
立られせりも乃乃家法しされば此犬石の像
てその花隼人狗人となりて仕奉り姿をた
むやぶ法し
○かくあるしれけり後に奈良の坊長西村知氏
考減見て云ふ以ての考どもは以てれせり御
碑のま見ふところ石質殊れて堅硬かるる推
らるれど年經をうぐうへに久しく土中に埋

○比古婆衣三

○七

志故よや石面以さく舊^{フル}剥落^{ツコネ}てさざかあらば表面
 の上方^{カミガサ}小碁局^{ゴク}のわづらみ見ゆるのみ
 て文字は一雙^{ヒトツ}をみ見えはてをれちにあはるた
 ち張^{カキ}圖て見をたあくのどし
 世よこの碑文^{ヒトツ}の拓本^{スリモノ}のほは
 此碑面^{サキ}の剥落^{ツコネ}ざりし前^{サキ}乃むの世^{サキ}ふさむかり
 明^{アカ}に臨^{ウツ}たりしもの世に傳はるはくもれ
 びとひへりおれよりて再考ふる東大寺要録の八
 卷^{マタ}に奈保山^{ナホヤマ}太上天皇^{タウテンノミコ}山陵^{サンレイ}碑文^{ヒトツ}養老五年十一月^{ヤウロウゴノトシノイッパツ}畧^{リョク}
 圖^ズ三通^{サンツウ}寫載^{シヤサイ}たり
 碑文^{ヒトツ}馬腦石^{バノウシ}高三尺^{ミタラシ}許^{ヨリ}とあり
 山陵^{サンレイ}



三	冬	養	所	太	之	大
日	十	老	也	上	宮	倭
乙	二	五		天	取	國
酉	月	年		皇	岑	御
葬	癸	歲		之	八	谷
	酉	次		陵	側	郡
	揆	辛		是		平
	十	酉		其		城

馬腦石^{バノウシ}三^ミ尺^{タラシ}許^{ヨリ}之^ノ
 碑^{ヒトツ}高^{タカシ}二^ニ尺^{タラシ}許^{ヨリ}之^ノ
 廣^{ヒロシ}一^{ヒト}尺^{タラシ}許^{ヨリ}之^ノ
 隨^{ツグ}御^{ミコ}陵^{レイ}之^ノ町^{チヨウ}數^{スウ}
 彼^カ碑^{ヒトツ}文^{モン}之^ノ地^チ
 也^ヤ則^{スレバ}東^{トウ}西^{セイ}十^{ジュウ}町^{チヨウ}
 故^{コト}南^{ナン}北^{ホク}八^{ハチ}町^{チヨウ}

此^{ホカ}別^{マカ}の二^ニ通^{ツウ}は塚^{ツカ}中^{ナカ}の文字^{モンジ}をり寫載^{シヤサイ}たりさてその
 三通^{サンツウ}比^ヒ校^{キョウ}るにともは初行^{ハツコウ}ふ御谷^{ミコヤ}郡^{クニ}と作^{カケ}るは添^{ソヘ}上^ノ

○比古婆衣三

○六

郡の謠なり。又あるは寫出さるるは二行み岑と作
 依を別の二通は本と作り、共に字、字の謠なり。又三
 共に側とかけあハ洲、字の謠なり。然改作は擬文
 己酉と作るは己酉。ま六行に揆とつけ別
 二通はは撥と作り。此は是月癸酉朔なれハ朔
 字の謠なり。集韻等に撥と改作り。但唐韻
 注に葬具とあり。造竈火葬莫改他處云々。丘體無
 就山作竈。變棘開場。即為葬處。と見え。お新ら
 のの既小剥壞るるところあり。ハ茂とりに
 小強てよみかして。書寫せよ。の三通在りつ依をとも

に寫載さるるはあり。あ乃要録を嘉兼元年小寺家の
 舊記ども。或書集たる書。ハ件ハ八卷なる碑文は。
 そ乃別卷よて。彼此比校補闕拾落成一卷了。といふ依
 中ふありて。その記さる年頃は知らざらば。仁治二
 年に寫せる由。與書せ。本な新。その舊記寫れると
 推察さば。くま。い。は世もある碑文の拓本を。さか
 ら入。新。要録なる文を訂。改。えて。も。新。たる物。なる
 あと。も。著明。なる。

少名毘古那神御名義

○比古婆衣三

○五

少名毘古那神の御名は義ふむとりの乃考何る試ふ
説くむとに少名は少童子にて少須久那志の須久
那り字も少須久ふ當たるもて那志那伎と活あり
云ふ詞なり。但し書紀には少彦名萬葉集には少彦名
さてその須久はとや大よ對へる小た意の言ふは
あれど此御名もて大よ亞ぐ義ありて書紀は私記
も昔稱皇子名大兄又稱近臣為少名也宿稱之義取於
少兄也と見え又官職の大少も大を於保伊少須奈
伊と云へ依意に同じ。於保伊須奈伊の伊ハ伎の音便
省言此神天神の御任にとりて大穴牟遲神と兄弟は

おや相並て云々の大功坐しまけりによりて大と
少と成もて稱へまけりなり。大穴牟遲神ハ兄
那神を弟のおとく相亞て國作なや大穴牟遲神ハ古
と名は宇那の宇は省ありたり。上の須久は久ふ
宇の省かると唱ふの時ハ例多し其は童子成
宇奈為といふ宇奈もて此神の形體の短小く坐
て。此事古事記書紀小童のおやく見えたる處ふよ
等ふ見えたり。抄に髻髮和名宇奈為俗用垂髮二字謂童子垂髮也ま
た字鏡も髻髮至肩垂白也宇奈井など見えたる宇奈

お新^ウりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居
あ^ナりて童子の髪を肩のあ^ナりてはくらあ^ナ居

りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ
りあ^ナるはか^ナふ称^ナなるは^ナ古^ナ画^ナあ^ナら思^ナむ合^ナせて宇^ナ

○比古婆衣三

○世

倭建命の御名は唱

倭建命は御名ヤトタケルと称し奉たりしなり。其は古事記に、此命熊襲建兄弟伐殺し、少時建はの偏を省けるにて古書に例多き弟建オトタケルが言ふ。於西方ニシノカタニよし傳は辨へられしを、おどりと除吾二人無建強人。然於大倭國益吾二人而建男者坐ケリ。是は以吾獻御名。自今以後應稱倭建御子云々。故自トキヨリツ其時稱御名謂倭建命云々。出雲國欲殺其出雲建而云云とありてその出雲建を打殺す。其時の御歌。小伊豆も多邪流とよみゆへる事もえり。さて又件の熊襲建等が事は書紀に見えき。によりて知られをの傳も大旨はねおど見えき。によりて知られを

其のく、てその建タケルが稱タケル申さる言は義は、今此西方の國よ。吾等二人小並ぶ建た者無き。大倭國よは猶勝りて建た男ハ在りけり。故御名を獻りて今より以後倭建御子と稱へ奉らむと申さる。ふて裏の意は、己等二人小勝れたる建き人は世間ヨに在らばと云ひけり。たれもひあがりせりけるが。今皇子はあよなき武力に堪タヘざる事。汝悟りて皇子を真マコトの大倭の建と稱し奉るは、なきなり。と鄙ヒナむきき真心マコトココロもとる。避りて負オウけなくも褒め稱へ奉れるなり。この建タケルが言ふ大倭國名なきが、此國名のねがやがて天下に建タケル坐せりと云

○比古婆衣三

○三

ふ意なり。さてそを軍物語る。日本一の剛者と云ふ
が。即天下にあらびぬき剛者の意なり。相似をり。
さて彼が殺さね奉る。今その期小。然るあり真心を称
へ申せり。茂^{ナレ}憐^{オムカレ}も欣感^{キコ}く聞^{トク}て。やがて御名と為を
戸へおられた。後^ノの事^ヲがら。陸奥^ノ話^ニ記^スる。義家^ノ驍勇^ノ絶倫^ノ
人^ノ靡^テ走^リ敢^テ無^ク當^ラ者^ト。夷人^ノ立^テ号^シ曰^ク。八幡^ノ太郎^トと。さて此皇子
見えし。もたのげあら似せし。心むえし。さて此皇子
の御名。書紀小日本武ま。餘古書ども小倭武とも書
れて。そ乃武字は例小タケ。おとタケ。シ。ぬどそは訓
め。タケル。とはむま。ぎが。お少思ふ人も。ゆる。ほけ
れど。書紀小梟帥^{タケル}と書ふ。茂。既く古事記も。建字を用ひ
られたる。よも准へある。ほく。ま。と。猛字も。武字と同じ

義として。おねにタケ。ま。と。タケ。を。な。せ。ら。め。ど。書紀小
五十猛神^{イタケル}と書る。ぬど。たをひ合は。ほ。く。さて。又。タケル。
て。ふ。稱^ナの。義^{ヨシ}は。記傳^{キデン}も。威勢^{イキホヒ}ありて。猛き者。茂云。ふ。稱^ナか
る。と。説^イを。れ。ら。る。が。ご。せ。し。ぬ。や。迷^イち。猛^マ勇^{ユウ}た。茂。タ
ケル。タケル。など。活^{イカ}して。云。ふ。言の上も。て。稱^ナと。せ。る。形
り。字鏡も。誇^ホ拳言也。伊比保^{イヒホ}已留^{ココル}。又云。太介留^{タケル}。類聚名義
等の字を。せ。ら。る。も。元は。猛^マ勇^{ユウ}た。意。あ。て。あ。に。云。ふ
と。同。言。ぬ。茂^{コトアゲ}拳言^{コトアゲ}して。猛^マ勇^{ユウ}々々^{タケ}。く。言^{コト}ふ。方。り。云
ふ。一方の訓も。とりて。注。を。る。との。形。也。今。の。俗。も。タ
など。云。ふ。こ。れ。あり。かく。て。又。此。命。の。又。名。倭^{ヤマト}男^ヲ具^テ。云。々
申。せ。る。倭^{ヤマト}も。倭國^{ヤマト}も。ね。き。く。勝。れ。ぬ。へ。る。由。り。て。かく。申

○比吉婆衣三

○世三

を御名義は古事記傳にさて景行紀四十三年此命の
説をねらうるがや。崩のへる處小日本武尊化白鳥云々因欲録功名即定
武部也と見えある武部戎古訓もタケルベとあり又
出雲風土記小出雲郡健部郷所以号健部者纏向檜代
宮御宇天皇勅不忘朕御子倭健命御名健部定給尔時
神門臣古祢健部定給即健部臣等自古至今猶居此處
故云健部まゝの姓氏録も建部公云々日本武尊之後也
あど見えある建部も多祁流倍と呼へるがや
くあくて諸國も健部と建部云ふ地の多たも出雲風
土記小見えある趣も健部の住居るによりて負へ

る名あるは此地名和名抄も多く見えある中に
伊勢國安濃郡建部太介無倍と唱を記さるあは多祁
流倍の流戎音便小無と云へるて書紀もタケルベ
とよめる小もれもむ合せと證とをべきなり。今建部
地名も氏も形もてタケルベと云ふめまどそはタケム
べのムを省きて云なれと云ふり氏もはタケム
唱ふる聞ゆるハ字も泥たるさうらあり但し續紀
速別皇三年十一月建部朝臣人上等奏言は始祖息
長谷且倉朝延改賜建部君と云ふる武藝を賞て
負さるへ武藝の意を同ト云ふ武藝を賞て
も此建部は依れる地名から
びる此准へて呼別つはきなり
因よ云此尊の御事戎常陸あゝ阿波の風土記も倭

○比古婆衣三

○比

健天皇と書るも、あの尊、そは國々伐征ミコトマケも出ましけ
るるとき、以て勇猛タケくれちりましける御稜威ミを畏敬カシコ
ら奉侍ヤマトタケルあまりに、國人ども倭健スメラミコトの天皇と稱へ奉り
し、我、そのかみは語言カタリゴトのまゝに、書記シキきるものある
は、今、世諸國クニの邊鄙カタホトリふと、其地ツノコの領主は、宰人ツカサビトの
巡察クニスグリあどる出せり、我、朴直スナホなる賤民シヅどもが、殿様と
稱て、崇アガへ拜ヲカむがある、免り、准ふ、は、あらざら
ど、のさゝか其らゝるさまの似たる、我、上古コトノミに免ぐ
らして、推オシて察シるは、

建内宿禰の名の唱
建内宿禰の名ハ、兄を味師ウチシ内宿禰と稱へる、味師ウチシも對ムカ
へき、美稱タメナふて、多祁志タケシ宇智宿禰ウチノミと稱むイある、は、し、
其は、まじ、古事記も、兄の名は、味師とゆるを、書紀も、
甘美と書た、姓氏録も、味と一字に書る、我、れ、ま、
宇麻志の志は、甘美、活言ハタキキコトある、事著シル、弟の名も、同ト
さま、小相對ムカへ、多祁志と唱へるに、建、字を當て書は
なり、書紀あど、小武、字、我、書るも、同ト、あ、く、て、其、兄弟の
名は、味、建、と、い、ふ、内、宿、禰、と、引、合、て、呼、へ、る、なり、
古事記、仁德天皇の御歌、小、建、内、宿、禰、の、事、我、宇、智、能、阿、

曾とよみぬハ神功紀に見えク依熊之疑ガ御軍人小
 向むて唱へる歌も于地能阿曾といへる証も證と
 在傳ハ阿曾は朝臣の省ありと云言あるよきてそ乃
 内と云古事記の傳ハ建内宿祢の内ハ味師内内内と
 一ッみて共小居地名にて大和國有智郡あり神名
 帳有智神社諸陵式有智陵あども此郡あり萬葉一
 内乃大野と云めるも此處なり兄弟共に此地あぞ
 居住せけむ云々と云をせむがあとハ此地文武紀
 宇知郡と見え萬葉集のいちゆる内乃大野も仙覺
 抄ハ大和國守智郡之野也和銅六年今註進風土記之
 時任太政官下之旨定二字用好字也とも注せり假寧
 令の集解ハ古記云葛上葛下内等郡云々とある内も

この郡古事記ハ孝元天皇の娶をる内色許男命の
 妹内色許賣命内也この内内地名を負たると云
 天孫本紀ハ大矢口宿祢の子ハ餘色雄命餘色謎命
 也と云る例多けれども然もいへりあり都志古と引
 の内之唱るハその内色許男命女伊賀迦色許賣命
 ものある比古布都押之信命を生しぬハ其子味師内
 成娶して比古布都押之信命を生しぬハ其子味師内
 宿祢次小建内宿祢なり相徴して内の地名成負へ由
 由を知るべきなり

倭日向武日向彦八綱田

○比古婆衣三

○共

垂仁天皇五年紀云皇后の御兄狹穗彦王謀反しぬへ
るに依りて八綱田戎將軍として撃たれぬぬ王師を
興して戦む遂に皇后皇子戎率て城を籠りて堅く拒
きて降すをば故八綱田火を放て其城を焚た皇子
戎取返し奉る王を皇后と共に城中より薨ぬひて事
平らぬる由戎載て天皇於是美將軍八綱田之功号其
名謂倭日向武日向彦八綱田也倭の字書紀に脱り
よりて補ふさて此時の事古事記に委しく載られ
る中書紀と異あり趣も見え八綱田が名を記され
べし記されざる其美名の義を考ふる日向ハ舊訓の
ごとくヒムケとよむ法其城火を向けて功を

立き戎褒めたまへる形も倭を世に比等おた由に
て後世に天下に日本一あど称ふありるをえたる法
し外國に對へて云武は夕ケシやいふ法き語勢なり
ふ意にあらは彦は例に男子の美稱ふて本名の八綱田より引合せて
唱ふ法命せむひをりし法

南方刀美神社二座考

神名帳云信濃國諏訪郡南方刀美神社二座名神
るにま一座は八坂刀賣神と坐せり今その證戎の
む續日本後紀云兼和九年五月奉授信濃國諏訪郡無

○比古婆衣三

○廿

位勲八等南方刀美神ミナカタトミ從五位下下同年十月奉授信濃國
無位健御名方富命ヤサカ前八坂刀賣神トメ從五位下下其由一神あり
ふ弁へ論文德實錄嘉祥三年十月信濃國建御名方
富命建字諸本脱たり類聚國史より據りて補ふ名字
建御名方富命印本より脱たり二写本より類聚國史によりて
仁壽元年十月進信濃國建御名方富命前八坂刀賣命等
前八坂刀賣命前八の二字印本彦及と作るハ訛を
兩大神階加從三位同三年八月從三位建御名方富
神前八坂刀賣命神祝此神名印本建御名方八坂前富
りて正キリさてあり預於把笏三代實錄より貞觀元年正
こあるは二神あり

月奉授信濃國正三位勲八等建御名方富命神從二位
從三位建御名方富命前八坂刀賣命神正三位二神あり同
年二月奉授信濃國從二位勲八等建御名方富命神正
二位正三位建御名方富命前八坂刀賣命神從二位れあ
も二神あり同九年三月信濃國正二位勲八等建御名方富
神進階從一位從二位建御名方富命前八坂刀目命神
目字印本自と誤れ正二位あれも二と見え南方刀
美神一柱を申はときは神と稱ひ八坂刀賣神一柱
改申はとは上に南方刀美命前と稱ひ命といひ
たははさて南方刀美も建御名方富と書るも同神名あり
たはは此をはたる下るも南方刀美と定めて書り

○比古婆衣三

○共

理都紀斗賣^{リツキトメ}と称^タへたる例^レに御名^{ミナ}小^コく女神^{メカミ}と坐^イは
 たり^ル。後^{ノチ}に前^{サキ}に下^シ諏訪^{スワハ}に千尋^{チヅク}池^イの中^{ナカ}より出^デたり古銅^{コウ}
 印^{イン}文^{モン}に賣^メ神^{カミ}祝^{イハヒ}印^{イン}とあり賣^メ神^{カミ}は女神^{メカミ}にて八坂^{ヤサカ}刀賣^{タガシ}神^{カミ}
 祝^{イハヒ}の印^{イン}にむ^ムあり事^{コト}向^{ムカ}りて池^イ中^{ナカ}に沈^{シヅ}まり在^アつる
 後^{ノチ}に。あ^ハれむと^トに合^アはれ^ル。後^{ノチ}に。上^ウに引^ヒきたる^ルおとく^{トク}文^{モン}
 神^{カミ}前^{サキ}八坂^{ヤサカ}刀賣^{タガシ}命^{ノミ}神^{カミ}祝^{イハヒ}云^{イハ}々^々と見^ミえを^ヲれ^ル相^ア殿^{テン}の^ノ八坂^{ヤサカ}
 刀賣^{タガシ}神^{カミ}の^ノ祝^{イハヒ}も^モ別^ワけて^テあり^リと見^ミえを^ヲれ^ル又^マた^タの^ノ銅^{ドウ}印^{イン}に^ニ事^{コト}
 は^ハ度^{タク}會^{ワイ}延^{エン}經^{キョウ}神^{カミ}主^{ヌシ}の^ノ神^{カミ}名^ナ帳^{チヤウ}考^{コウ}證^{テイ}に^ニ近^{チカ}世^セに^ニ云^{イハ}々^々と^ト君^{キミ}
 其^{ソノ}印^{イン}字^ジ種^{シユ}の^ノ藤^{フジ}真^{マコト}幹^キが^ガ金^{カネ}石^{イシ}遺^イ文^{モン}ま^マと^ト何^{ナニ}が^ガ一^{ヒト}君^{キミ}
 集^{ツク}古^コ十^{ジュウ}種^{シユ}の中^{ナカ}に^ニあり^リと見^ミえを^ヲれ^ル然^{シカ}に^ニば^ハと^ト南^{ミナミ}方^{カタ}刀^{タガシ}美^ミ神^{カミ}
 諏^{スワハ}訪^フ社^{シャ}藏^{ザウ}と^トあり^リと見^ミえを^ヲれ^ル然^{シカ}に^ニば^ハと^ト南^{ミナミ}方^{カタ}刀^{タガシ}美^ミ神^{カミ}
 后^{ノチ}神^{カミ}を^ヲり^テ後^{ノチ}に^ニさ^サく^クさ^サく^ク免^{マク}れ^ルと^トむ^ムを^ヲり^テ然^{シカ}に^ニば^ハと^ト南^{ミナミ}方^{カタ}刀^{タガシ}美^ミ神^{カミ}
 神^{カミ}の^ノ由^ユあり^リて^テ主^{ヌシ}神^{カミ}の前^{サキ}取^{トル}持^チ坐^イして^テ祭^{マツル}られ^ルる^ルに^ニ

てを^ヲあり^リて^テ後^{ノチ}に^ニさ^サく^クさ^サく^ク免^{マク}れ^ルと^トむ^ムを^ヲり^テ然^{シカ}に^ニば^ハと^ト南^{ミナミ}方^{カタ}刀^{タガシ}美^ミ神^{カミ}
 社^{シャ}上^ウ社^{シャ}と^ト下^シ諏^{スワハ}訪^フ小^コも^モ下^シ諏^{スワハ}訪^フ社^{シャ}も^モ下^シ社^{シャ}あり^リて^テ僅^ヒ小^コ二^ニ
 座^イに^ニ神^{カミ}を^ヲ祭^{マツル}り^テ一^{ヒト}座^イは^ハ南^{ミナミ}方^{カタ}刀^{タガシ}美^ミ神^{カミ}と^ト申^{マツ}せ^ルと^ト今^{イマ}一^{ヒト}座^イ
 の^ノ神^{カミ}名^ナは^ハ詳^{シユ}に^ニら^ルに^ニ其^{ソノ}一^{ヒト}座^イも^モ心^{ココロ}を^ヲり^テ前^{サキ}八坂^{ヤサカ}刀^{タガシ}賣^メ神^{カミ}
 以^ヒて^テ社^{シャ}式^{シキ}内^{ウチ}に^ニ社^{シャ}を^ヲり^テ小^コの^ノ定^{テイ}り^テら^ルに^ニと^ト今^{イマ}推^{オシ}考^{カウ}す^ル
 に^ニ上^ウ古^コより^リ仕^シ奉^{ホウ}り^テ来^キたり^テ大^{オホ}宮^{ミヤ}司^シの^ノ大^{オホ}祝^{イハヒ}と^ト云^{イハ}ふ^ル古^コ
 より^リ上^ウ社^{シャ}に^ニ方^{カタ}小^コ住^{スミ}著^ツり^テ在^アり^リと^ト以^ヒて^テ上^ウ社^{シャ}を^ヲり^テ後^{ノチ}に^ニ上^ウ社^{シャ}を^ヲり^テ
 本^{ホン}社^{シャ}を^ヲり^テ下^シ社^{シャ}に^ニ諏^{スワハ}訪^フの^ノ地^チを^ヲり^テ上^ウ下^シを^ヲり^テ別^ワけて^テ後^{ノチ}に^ニ上^ウ社^{シャ}を^ヲり^テ
 訪^フり^テ本^{ホン}社^{シャ}を^ヲり^テ移^{ウツ}り^テ下^シ社^{シャ}に^ニ諏^{スワハ}訪^フ小^コを^ヲり^テ別^ワけて^テ祭^{マツル}来^キたり^テ小^コ
 ぞ^ゾあり^リて^テ後^{ノチ}に^ニ上^ウ社^{シャ}を^ヲり^テ移^{ウツ}り^テ下^シ社^{シャ}に^ニ諏^{スワハ}訪^フ小^コを^ヲり^テ別^ワけて^テ祭^{マツル}来^キたり^テ小^コ
 あり^リて^テ後^{ノチ}に^ニ上^ウ社^{シャ}を^ヲり^テ移^{ウツ}り^テ下^シ社^{シャ}に^ニ諏^{スワハ}訪^フ小^コを^ヲり^テ別^ワけて^テ祭^{マツル}来^キたり^テ小^コ

訂文方波紀治るる名る神刀ああり池む
一徳富水二郡治るる名る神刀ああり池む
あ実命内五鴨一健方方社賣りわ中論
へ録の孫等年大如御命彦座をがぬざに論
ら三誣神神八神此名彦はとををけと持む
れ代訪別と月御さ方神あ載と又れ来きむ
ざ実社神あ己子か富別らぬれ或ばりよべ
り録考ふ須朔主唱孫名社もを辱に印その
都見ハは波辛玉の神神をばハ社出の池む
にえ以古南遣使と号の別神大や八坂だ南池ち
よりふ事方刀美祭龍那帳申彦水内郡健御
て神ぞ記傳十神水内そ神信持國名借健御
那名や傳十神水内そ神信持國名借健御
る那誤も四卷ふ説健御濃持國名借健御
修誤も四卷ふ説健御濃持國名借健御
其は

仁德紀中筑而の字まゝ全匏

仁德紀十一年冬十月云々將防北河之滂以築茨田堤
是時有兩處之築而乃壞之難塞時天皇夢有神誨之曰
武藏人強頸河内人茨田連衫子二人以祭河伯必獲塞
則覓二人得之因爰強頸泣悲之没水而死乃其堤成焉
唯衫子取全匏兩箇臨于難塞水乃取兩箇匏投於水中
請之曰河神崇之以吾為幣是以今吾來也必欲得我者
沈是匏而不令泛則吾知真神入水中若不得沈匏者自
知偽神何徒亡吾身於是飄風忽起引匏没水匏轉浪上
而不沈則滄々汎以遠流是以衫子雖不死其堤且成也

○比古婆衣三

○世

是因衫子之幹其身非亡耳故時人号其兩處曰強頸斷
間衫子斷間也件衫文中之築而此二字讀のたき茂と
く按ふに斷間の寫訛なり其は斷間茂原本又斷間と
以ふ趣小あざらゑて書る茂筑而と見形して寫訛た
うへまゝと筑を築と混寫たるをのなるは上
字あ下文小強頸斷間衫子斷間とあるお新不當なり
かくて今新印本のの築而此假字小夕エテとある茂
細密小見ればテの字此上畫の三角あるがおとく見
ゆるは彫工の削り遺さるも此と見えきり志う新ハ
印本の彫下此本文の字ハ既も誤をりけ新ど假字は

形わむるは新羅時隨朝浪遠國中とありしものありあ
疑あふはの古体よる紀中然れば今此處の文茂
訂正して是時兩處之斷間乃壞之難塞とさると記
は其義明あり此假字の誤潮浪遠國中とありしものあり
潮浪の假字の文中小件の事を隨朝浪と書てた其條
假字の誤をさしをり然れ見誤りて字小移し
かと誤る奥書の形私記の事と隨朝浪布奈々美とあり
り但し此誤をくべり印本此假字に紀小印本とあり
同く誤をりまゝと衫子取全匏兩箇臨干難塞水即
辨ふはきて正り○まゝと衫子取全匏兩箇臨干難塞水即
取兩箇匏投於水中請之曰云々あゝ六十七年紀小も

○比古婆衣三

○卅二

於備中國川嶋河流有大虬云々於是筮臣祖縣守云々
臨汎淵以三全匏投水曰云々汝沈是匏云々と何る全
匏乎舊訓ともにおつしはサゴとあり其おつしは和
名抄雜藝類小文選云拍浮俗云於布須是也拍打也普伯反今按まゝ類
聚名義抄小も拍浮おつすと何る於布須と同言よて
其を水上に浮ぶ藝哉云むておつしおつすと活カダラく言
と通えり故水よ浮ぶ料小用ふる匏をおつしはサ
ゴと云へるふく今浮ウキふくべといふものあらはる
しから籍晋書に拍浮酒船中まゝ列子孫林注小游拍
浮者也まゝ淮南子百人抗浮注小浮匏也埤雅に匏云

云古者佩以渡水とあるあどとえざるおもれをひ合
を造りかくて全匏といも書けるを漢名はひまど見
あたらぬぞ匏の類の種々何る中にも今も水も浮ぶ
料小もまべく俗ヨふくべと呼びく形状カタチの圓に長く
太細フトホクある處なき殊用ふるが便よければ古も必然る
状サマある哉ぞ用ひきりけむさればそのの尋常に水
斟器クムモノとい或も酒酌ど入る器といはる類も太細ある
匏とい殊コトあて状の全を義ヨコよる其物實哉あまりに傳
へむとて然サは書れをりけむ故下文よは全字をむ省
きて徒に匏とのみ書れうはあはるは六十七年紀あ

との云云お新て。於布須とていふ事とあり来れり
も。お海傍。源氏物語手習巻。池にたよぐりまや
も。田舎人の言ふ魚の向さまへちして行哉。たぐり今
云ひ。浮沈あどして立巡りをあてあそぶといふるを
聞けり。此れと云るは。布須の意。近し。游字あどを
あそぶと云るは。實を精し。からねど。然る訓さまは古
ヨグとて免るは。不令泛の令字。印本合と何るを訛写
をら多かり。○一本によりて訂すべし。○滄々沈の三字。印本に滄
り。一本によりて訂すべし。○滄々沈の三字。印本に滄
滄沈と書は。訛写あり。お新も一本によりて訂す。沈
。其義さらに通え。字書。小滄を水疾聲。まど波下。沈
どろえ。沈を浮貌とて。此の文義にあらへるがう

へ。小。印本。お新。假字に三字引合き。トク。ス。ミ。ヤカ。ニ。ウ
キ。オ。ドリ。ツ。とあるよを合へり。お新も古訓の假字
ハ正しく遺れお新り。そもく國史どもの今在る印
本どもは。いづれも誤多き。他本どもに校合せて。よ
く訂して。板ふも彫らせねり。まわしく人もられも。お
もひわたり中に。日本書紀。お新。印本の。寛文九年己酉正
月書。賈武村昌常。山本常知。訓假字。お新。中。小。は。上。の。件。小
八尾友春等。名。署。あり。論へ。ふ。ごと。た。免。て。を。き。古。言。も。存。り。又。假。字。に。よ。り。て
おの。い。ら。本文を訂すべし。證とほべた。あやあども
ある。を。い。ふ。へ。お新。私記。ども。お新。説。又。博士。たち。の。訓。さ

海を書加るたるふてよく選ぶとりて用ふべきこと
のをくぬのらぬ浅印本よむその片假字を写誤也又
本文此字旁に施くべき位を差へきるところあども
あり又彫工の彫るたのへきりと見ゆるとありちこ
をくぬのらぬがうへふ何まよる年経ぬるまよる刻
字の鈍損ねて鮮明ならぬなりぬるをいせあきらし
き事なりゆのでまゆ今此印本浅訂し訓假字をむ舊
本移まくにてさかいら浅加へ更よく訂して彫改免
させ永く世小傳へまわし記あやまるそ古語の別

み浅
浅を海より新川よまれ渡り行く水路をいふ名か
り其はまゆ玄蕃式に蕃客來朝て難波津小到了時迎
船浅遣ちして國使小宣し知ぬふ大命よ参上來留客
等参近奴攝津國守等聞著水脈母教導賜宣隨迎
賜波久宣といえたる水脈おれあり雜式小大宰貢雜
物船到縁海國濠引令知泊處といえたる濠引を船に
て水脈を教導し事よむ和名抄よ水脈船羨乎比岐能
布祢といえたるおれあり其を水の深さ浅さ暗礁の
ありあしおれと浅知里よるいよつけて水路の便宜を

わきまへく泊處小到りまゝフナヒラキ發船してさして行くオキ澳
べつて出る水路を教導く船カキ浅カキひるり萬葉集十五卷
長に御津の濱カキ小大船カキまカキ楫カキ志カキぬきカキのら國小渡
り行カキのむとたぐむカキのふ敏馬カキをさして潮待ちて美乎カキ
妣カキ伎カキ也カキけむ澳カキへカキふは云々廿卷小四方カキ於國より奉る
貢の船カキも堀江より美乎カキ妣カキ伎カキの朝カキあカキぎカキ小楫カキひカキた
上カキ上カキ云々とみえ又十八卷小堀江より水乎カキ妣カキ吉カキの
つ朝あカキぎカキに楫カキひカキきカキ上カキり云々又堀江より水乎カキ妣カキ吉カキ志
ゆカキく御船カキさカキはカキ志カキづカキをカキのカキともカキをカキ下カキ男カキの徒カキ川カキ於カキ瀬カキ申カキを
瀬カキとカキも川カキをカキ豎カキもカキ横カキもカキ渡カキりカキ行カキべカキきカキとカキこカキろカキをカキひカキふ
名カキありカキ濤カキ引カキして御船路カキよく仕カキ奉カキれカキといカキふカキ意カキありカキさカキ

て此歌カキを御船カキ以カキ細手カキ沂カキ江カキ
遊宴之日カキ作也カキと附注カキなりカキあど見えたるあれあり又
その水脈カキ小標カキ木カキ茂カキ立カキ置カキて表準カキとほカキるカキ茂カキみカキをつカキくカキし
とカキひカキふカキ水カキ脈カキつカキ杓カキの義カキあるカキ法カキしカキ雜式カキ小カキ九カキ難カキ波カキ津カキ頭カキ海
中立カキ濤カキ標カキ若カキ舊カキ標カキ朽カキ折カキ者カキ搜カキ求カキ技カキ去カキ色カキ葉カキ字カキ類カキ抄カキ小カキ此カキ式
シカキツカキクカキヤカキミカキエカキクカキシカキ濤カキ標カキこカキれカキよカキくカキ貫カキ之カキぬカキしカキの土佐日記
小六日カキ又カキ茂カキつカキくカキしカキのカキをカキやカキりカキひカキくカキ難波カキ於カキ津カキよカキは
きて河尻カキよ入ると見えたるこカキをカキ形カキすカキ古カキ記カキものカキにカキも
萬葉集十四卷カキ遠江カキ小遠カキつカキあカキふカキこカキひカキかカキさカキ細江カキ於カキ水カキ乎
都久思カキあカキれカキをカキたカキのカキ免カキてカキ向カキさカキまカキしカキものカキ茂カキ濤カキ標カキのカキ在カキる
のらむと思へるカキよカキかくカキ心の浅カキたカキはカキ人カキぞカキの免カキちカキるカキと
の譬喻歌形カキり源氏物語カキみをつカキくカキしカキの卷カキよ源氏カキ於

○比古婆衣三

○廿七

と都婆良と時とある都夫あれなり後の歌も岩間
水之都夫多都時とある都夫あれなり後の歌も岩間
の水はたふと軒は玉水つふとあどもちめ
り此事あふ心ちてもある清き哉この引歌はちあ
み考出たるを志む後の歌は伊勢集の山川の音
らくあに書けけ後の歌は伊勢集の山川の音
にのみたぐもき哉みをやあがら見るよしも
が源氏物語須磨巻に逢ふせあは涙の川にあづみ
しや流るるをのほ免ありけむ狭衣お落たぎ川
涙のみをはちやけたど過ふかかにはりやをに
る形どとせてよめるもたこ也又和歌六帖お貫之春
たちて風や吹とくけふそれと瀧のみをより玉ぞ散
けると見えとふを瀧川は氷の春風お解けそ免て一

まぢ流るるがことに速くて石おど小觸れて飛ちる
趣をよ免る形也夫木抄雑小行家水上を瀧のみを小
てちやければ布引川の末ぞ氷れ系准へて知ふ清し
又古今集小雑題あらは天の川雲はみをよるちやけ
れむ光とが免は月ぞ流るると見えとあをたがあふ
た見きるところは天空哉天川アヘ見おして浮雲の風
小志とがひて行く哉水脈よ見おしてそれよはれて
月のとがまらば流れのさぶくれをむきにまらへ
てよめりと知こえたり然る小夫木抄に大藏卿有家
夕立は雲のみをよりつとひきて軒端おたけり瀧の

白玉とよみかへるを。雨雲はこぼれに一ほぢ風小吹形
がされて見ゆ水。川水のみ浅小たとへられりや
たこえ。又定家卿。天の川八十瀬も知らぬ五月雨小た
もふも深き雲のみ浅小た。又為家卿。天の川雲の長を
ある五月雨小。とぞえも志らぬかさ。たの橋あどと
みかへるを。かの古今集ある詞もとひたてよみか
へるものなり。法嘉元御百首に。權大納言。局。あ。と。た
を。あ。り。峯。あ。又土御門院。御集に。冬の日を雲はみをに
かけたり。又土御門院。御集に。冬の日を雲はみをに
てもやければ。形あふ。年の志あらみもあふ。とよは
さかへるは。是も風のたやくて。浮雲の一すぢ流れ行

く如く小見ゆる。浅水はみをおたとへ。冬日の短く過
行く小よそ。あさせりへるなり。法寛喜四年石清水
若宮歌合に。頼氏朝臣。朝まどた霞のみをも志ら波は
たけをの川を渡る。かち人夫木抄。ふ載。せ。よ。め。あ。を。
霞の中に。立田川のみゆる。浅霞のみをと見ふ。たふ
趣と聞え。ま同歌合。祝部。成茂。宿祢。水上。や。岸。の。柳。は
ふかみどり。霞のみをたふ。ありけり。師兼卿。千首
に。ま。の。江。は。松。や。霞。の。み。を。は。く。し。深。は。浅。き。も。ち。ど
ハ見え。ゆ。ま。ど。え。を。は。霞。は。海。のおとく見ゆ水
心むえ。もて。柳松を濛標ふ。とりあ。たる。作意コ。ロとたこ

えた今そ然らの文義によりて推考ふふに寧は正中
からぬそのこを然あふが中にはきて彼ふくらべと
を此イナカユルが少許さあくありとかりそ然にさざる
かどのところを用むたる意然辞と通ゆる哉古の博
士たち然然了意小叶ふ哉言哉擇むてあくるあら
むしてさざ然た系訓詞の傳たれるものあるは
たき古言の古事記書紀萬葉集或を宣命祝詞あどの
中おたぐ一り二つ見えたり哉近た世よびては
古學するともがらハさらよてはらぬき人のさへ
小用むあふ言もある然りむしろとひふ詞もたま
ま漢籍をみよののみに遺り傳たりてさふうさ
はあれ言の義然さざうあらぬハくちをさきあ
ぞまら但し皇國よは寧字のごときまちをさきあ
意の言

えもとよりあらざりはら然どわわのさ其意もちか
き言をえらびくろろあらむして當たりしものか
るはし蓋あどの詞も古言も万葉集の歌詞然中
さい望希よを見えきれど他の古書どもをさ
の意見えどもはら漢ふみよそ然の古書どもをさ
はと無寧も無乃も寧とは意然異なるれをむきあれ
どわわのさになよわして寧と同一訓を當たりしも
然あるはし於と於乎と嗚呼あを我ともよアとよ
よむあどもとりみ縦と縦と饒と縦使あを並に知トヒ
ひあるを同トよみよ其意ハあと形るあぢをかくて
其むしろといふ言然義をことに考ふはきあへの
證だふもなき哉せ先てかむあふるにもとは敷物然
筵ムシロと同義よのよふ言からむうとわをさるること有

り。然^ナるはその筵といふものちもと草茂束ねて。一重
 に編^アて敷物小作れり。茂いふ名あり。稲^カむろち。薦^カ筵^カ
 いふたぐひ。さて其むしろを。ゆく重^ヘもあさねて。安^ク
 居^ヲる。茂くもの。たう。茂^タ疊^ミといふ。神代よりきあえ来
 え。むしろを。殊^ニ厚^ク重^ネむ。さう。茂^カ稱^ルふ。名^{アリ}八^重疊^トいふ。あ
 例^ノの。彌^ニ重^クあり。後^ニ世^ニ疊^トいふ。も。茂^カ便^ニ宜^ク製^ルは
 も。茂^カ遺^レれ。あ。あ。かくてむしろは。地^チ上^ウる。れ。板^イ敷^ク箒^コ
 名^ノの。遺^レれ。あ。あ。かくてむしろは。地^チ上^ウる。れ。板^イ敷^ク箒^コ
 ふ。まれ。り。り。そ。免^ニ座^ヲを。設^テく。系^ト時^ニ引^キ敷^クを。の。赤^レ
 む。や。ぐ。て。その。敷^ク物^ヲ名^ノふ。も。う。は。して。い。る。る。ふ。も。や
 ち。あ。ら。む。た。み。の。む。し。ろ。の。ち。い。ふ。を。む。し。ろ。を。わ。づ。う。よ
 て。其^ヲを。御^ノ座^ニ敷^クと。も。い。ふ。は。む。し。ろ。の。敷^クの。座^ニ中^ニよ。良^ク人^ノ
 御^ノ座^ニ敷^ク由^チある。は。今^ノ俗^ノ間^ニよ。あ。べ。て。御^ノ座^ニ

と。い。ひ。ま。と。薄^ク縁^トも。呼^ボぶ。も。の。あ。る。を。其^カご。り。り
 る。は。し。さ。て。こ。の。む。し。ろ。た。う。その。差^リ別^レは。古^ノ書^トも。に
 み。え。う。あ。趣^ヲを。と。り。す。べ。て。く。ち。い。な。わ。れ。を。ふ。小^ノ馬^ト
 き。こ。と。は。別^ニあ。あ。あ。あ。の。あり。な。わ。れ。を。ふ。小^ノ馬^ト
 命^ノ婦^ト集^ル。た。う。み。の。中^ニより。き。り。く。ば。の。さ。月^ヲを。り
 ふ。い。で。た。う。れ。む。き。り。く。ば。む。し。ろ。い。あ。ふ。う。れ。り。あ
 ら。ん。た。う。その。中^ニに。秋^ハは。来^ル。あ。け。里^トい。る。る。を。む。し。ろ
 は。う。り。そ。免^ル。り。の。あ。れ。む。虫^モ安^ラら。ば。れ。も。ひ。て。
 疊^ノの。り。う。茂^クむ。し。ろ。を。さ。う。み。れ。の。秋^トとして。住^ミた
 り。と。見^エて。あ。う。に。出^ル来^ル。事^トよ。と。い。ふ。意^ヲて。二^ノ句^ヲ
 茂^クむ。し。ろ。と。い。ふ。ふ。本^ノ語^ノの。か。り。そ。免^ル。あ。意^ヲの。む。し。ろ
 と。い。ふ。詞^ヲを。も。さ。せ。たり。と。き。こ。ゆ。但^シこの。歌^ノ中^ニあ。と。書^ク

○比古婆衣三

○聖

ふ本あり。これをとりて。虫の床下に住て。建の
裏を見てあり。意ともたぬ。むらさきて。歌ま
たりて。きこゆれ。今群書類。本によりて。引出
は。いへども。あ。の。歌。三。句。に。た。も。ふ。ら。ん。と。い。む。結。句。
よ。秋。を。来。に。け。り。の。ひ。す。て。ふ。あ。ど。意。詞。と。の。結。句。
も。た。こ。え。が。け。れ。ど。今。詞。書。よ。り。て。歌。主。の。意。を
く。も。い。ち。あり。て。か。そ。を。い。の。考。と。年。ご。ろ。た。つ。の
形。く。れ。を。ひ。ご。り。つ。る。城。此。比。あ。る。人。の。い。の。に。た。も
ふ。と。請。問。へ。ふ。に。も。よ。わ。され。る。に。よ。り。て。殊。更。小。考
たる。形。り。甚。し。た。志。む。お。と。ふ。は。非。る。う。と。我。だ。よ。思。ひ。
多。由。た。も。あ。く。城。た。ぶ。に。知。られ。を。と。て。あ。ら。む。より。を
と。考。ご。ろ。み。き。る。と。い。城。か。く。は。書。志。ふ。い。あ。ち。後
に。よ。く。考。定。む。べ。し。

たぬく

此詞を。あ。ご。り。ご。る。世。よ。を。た。こ。え。き。る。と。形。し。古。今
集。恋。三。よ。み。の。歌。よ。あ。の。く。免。ち。印。が。ら。く。と。あ。け。ゆ
け。む。た。の。が。き。ぬ。く。あ。る。ぞ。悲。し。た。定。家。卿。の。此。集。形
れ。き。る。顯。昭。本。よ。結。句。を。た。る。ぞ。悲。し。き。と。あ。る。た。れ。と
り。て。た。あ。ゆ。今。在。る。全。部。の。顯。昭。形。注。本。よ。は。こ。の。歌。み
べ。え。と。よ。免。ち。が。見。え。て。情。ふ。あ。く。め。ご。た。き。城。ね。や。せ。
て。男。女。相。寢。し。て。別。あ。く。期。形。あ。と。城。う。ち。ま。か。せ。て。い
ふ。詞。の。ご。と。く。ふ。を。形。り。た。る。も。の。あ。る。べ。し。源。氏。浮。船
卷。に。風。形。音。を。い。せ。あ。ら。ま。く。霜。深。記。曉。に。れ。の。が。き

ぬねむをむ屋ゝりにありたゆこくちして御馬小乗
りぬふなど云々と以へゆも件の歌にとりたりとた
あえたぬくせ以るることのさまもたれげあらと
く聞えきり

あくがる

あくがふといわはうかゆとわわのた同ト言のごせ
くたこゆれどそれ差別ありてきこゆふげあくがゆ
とを何ふまれその在^{アリカ}所^カ離^カ出^カる^カ哉^カ以^カむ^カ言^カの^カ義^カハ
ふ^カ言^カの^カ然^カ以^カふ^カ由^カは^カあ^カ在^カの^カ約^カまり^カあり^カく^カは^カ在^カ所^カ離^カハ
ふ^カ以^カげ^カく^カとい^カゆ^カ言^カは^カ何^カ處^カ何^カ所^カ何^カ方^カ何^カど^カ書^カて^カぐ^カと^カ以^カ

ふま處^カ所^カ方^カ東^カどの^カ字^カ哉^カ當^カたり^カふ^カより^カて^カ心^カ得^カべ^カく^カか
れ^カち^カ同^カ集^カは^カ離^カ字^カ哉^カ用^カを^カる^カよ^カて^カ其^カ意^カを^カ知^カふ^カ哉^カ但^カし
此^カ言^カの^カ義^カは^カは^カや^カく^カ荒^カ木^カ田^カ久^カ老^カ翁^カの^カい^カへ^カる^カ説^カは^カき^カこ
え^カを^カ其^カを^カ疎^カある^カか^カを^カあ^カれ^カむ^カさ^カら^カま^カか^カく^カは^カ以^カへ
り^カふ^カう^カか^カる^カを^カ何^カく^カが^カれ^カ出^カて^カう^カき^カた^カぐ^カへ^カゆ^カが^カお^カせ
く^カさ^カご^カま^カり^カあ^カく^カて^カあ^カる^カさ^カほ^カを^カ以^カる^カり^カと^カた^カら^カせ^カて
そ^カれ^カあ^カく^カう^カると^カ以^カへ^カふ^カ詞^カ萬^カ葉^カ集^カな^カど^カの^カ古^カ歌^カふ^カは^カ見
え^カば^カ古^カ今^カ集^カに^カ春^カ素^カ性^カ法^カ師^カの^カ以^カり^カて^カ野^カ邊^カに^カ心^カの^カあ
く^カが^カれ^カむ^カ花^カち^カら^カば^カむ^カ千^カ世^カも^カ經^カぬ^カ哉^カ貫^カ之^カ集^カの^カ思
む^カあ^カり^カ恋^カし^カた^カと^カきは^カ宿^カめ^カて^カあ^カく^カが^カま^カぬ^カべき^カこ
こ^カち^カを^カを^カれ^カと^カ見^カえ^カを^カる^カが^カや^カ古^カの^カ法^カき^カち^カて^カそ
れ^カ詞^カの^カあ^カく^カろ^カれ^カた^カら^カえ^カや^カを^カき^カ哉^カあ^カれ^カか^カを^カ舉^カて^カ以^カて

○比古婆衣三

○聖

は伊勢集に月影の軒おあまりにさしゆりて。おやわ
がくろろあくからしゆ。源重之集に花も散り鶯の
音もくれ行つむわが山里はあくがまふ。後拾遺
集神。和泉式部。そのおもへむ澤の螢も我身より何
とぬれ出るをまうとぞ見る。源氏柏木巻。ほとひそ
免ふしたる志ひお身ふをかへらばありふ。哉。の
院の内にあくがまけりらむ。むをむとく免たまへら。
幕木巻の歌ふ。おきたるぞいと悲し。たねしとく乃
あくがれがたき心あらむ。ふ。あ。の。巻。お。詞。も。云。々。あ
ふ。ど。そ。の。他。お。巻。千載集に。俊頼朝臣。梅が香はたのが
よもぬやあり。

垣ねをあくとぬれて。まやのあまりにむまもとむあり。
六百番歌合に。有家卿。住あうとく。哉。雲雀おあくが
れて。ゆくへをたらぬともに入ぬ。お。お。ど。見。え。と。う。哉。
も。く。知。ふ。法。下。類。聚。名。義。抄。ふ。懂。字。を。往。来。也。と。注。して。
も。懂。々。往。来。と。み。え。を。由。ある。哉。説。文。ふ。懂。意。不。定。
也。と。注。せ。り。是。ら。の。義。も。て。心。ち。ら。ひ。て。當。を。う。訓。と。
き。こ。又。そ。の。あく。が。う。哉。あ。あ。お。ろ。と。か。よ。ち。て。も。い
へり。續後拾遺集秋。藤原行房朝臣。こ。乃。は。ら。八。十
嶋。か。け。て。む。む。月。ふ。あ。あ。が。れ。い。ひ。お。秋。お。船。人。と。さ。え
た。う。あ。ど。あ。れ。あり。印。本。に。あ。く。お。れ。と。書。る。を。詛。あり。
ふ。よ。き。く。あ。こ。が。れ。と。い。ふ。る。あり。此。外。も。例。あり。さ
て。又。上。ふ。舉。ぐ。る。懂。字。哉。も。林。逸。ぐ。節。用。集。に。む。何。あ。ら。が

○比古婆衣三

○巽

よありと詞ふも。帚木卷に。さげらは一げよ思むまひは
をけし見えま。うむかくもあおがらさぐらま。
上上は引さるごとく此卷の歌はあくがれとよ若菜
み詞にちあくがれあこがれまはへく用むきり若菜
上卷に吾身茂さしもあふおぼたさまに。あおがらし
あふ云々。あふあり。他の物語どもよも見えきり。かく
て又うかふも。千載集恋に左兵衛督隆房朝臣。恋死あ
ばうかれむたまよ志む。だふわが思ふ人の片まに
といまれ上は引出たる澤の螢もさぎ身よりあくが
て殊よけちき出るさすうとぞ見るとよめさにむかへ
めよく聞ゆ。六百番歌合に。季經卿。うかれ免のううれ
て何りく旅枕すみつき。のさ恋もまふかあ。ねど見

えたるあまあり。詞ふも。源氏葵卷よ。むとあしにう
とうかれふ。ころろ。志のまりのうれおさあけ
ふや。狭衣よ。あさましくねがうかれきり。心も。を
こしあかりて云々。あさ君の御心。けうのまほむむて。
はむむありあ。ろとぐめぬ。ふ人もあくて云々。天武紀六
年の詔よ九浮浪人送其本土ねども見ゆ。このうらるといふ詞を。上
よひへあおとく。あくがれたあうへ。茂ふふことばあ
から。事のさまによりて。あくがれさるとカクミ互よかた
むて。同一意のおとくに。をたこむら。まねら。ち
き。茂色葉字類抄よ浮客をか心か心とよみ。又客を浮
客也と注して。ウかか心か心か心とよみ。又客を浮

ぎれあり。さて若ハ正字も字の詞ヲ差別ケチ哉。かくらね
通ふ。與蕩通と注せり。まふはときは。たのげ。あらそ乃あ。ろも。あぢをひ知
らる。くあは。は。

たくら免の花

源氏物語末摘花卷に。源氏君の常陸宮のたくら免の
花の色は。ごと。三笠の山は。をとめ。哉。む。を。て。く。や。う。こ
む。す。さ。び。く。出。給。む。ぬ。る。哉。あ。や。命。婦。の。ひ。と。を。の。し。と
思ふ。ろ。く。ろ。あ。ら。ぬ。人。々。あ。ぞ。御。む。と。り。あ。み。を。と。や。ぐ
免。あ。へ。り。あ。ら。び。さ。む。た。霜。あ。さ。に。か。い。ぬ。り。こ。の。め。は。

ちあの色あむや見えけらむ。御けけ。たり。歌。け。ひ。と。を
あ。し。た。と。ひ。る。バ。あ。が。ち。あ。る。御。事。か。あ。此。中。よ。に。や
る。ら。は。あ。も。ぬ。う。免。り。云々
玉。子。小。櫛。に。件。の。た。くら。免。の。花。は。と。あ。る。哉。論。む。て。あ
れ。を。た。くら。免。の。花。の。と。有。し。を。此。名。き。く。あ。れ。ぬ。故。よ。
ら。哉。う。の。誤。あ。ら。む。と。思。む。て。さ。う。し。ら。に。改。め。は。る。あ
る。は。た。くら。め。哉。梅。と。う。へ。て。う。ら。ふ。は。き。よ。し。も。あ
き。う。へ。あ。た。と。ひ。ふ。こ。と。も。穩。あ。ら。ざ。る。を。や。注。した。
た。ら。め。の。花。と。ひ。ふ。は。き。む。め。の。花。と。ひ。へ。る。を。書。誤
ぬ。る。が。あ。ら。む。と。あ。る。は。い。み。ど。き。ひ。ぐ。と。之。新。撰。字。鏡

に華太々良女と見え内膳式も多々良比賣花と見え後の書どもよはたくらべともあり風俗歌花鳥に引ぬへおどしと注されたりたうめはたくらめはるほしと説かれよまこと小然るおとあり但らうはいとちく似てつね書詠る字おればさうらよ改をらむとねしはありさごむほきにあらざあべしされど字鏡に太々良女式も多々良比賣と見え後の書どもにたくらべといゆるものいうありのとも注されむねのれ其ものざね成らざればさらふ考ふるにまじかたくらめ花の色乃ごとくうごむたまへふも政事要畧七十六に載せる衛門府風俗歌ふ

多々良女乃花乃如加以祢利好牟夜減紫乃色好牟夜と見えたる歌をうごひゆる下はあろはかの常陸子君の鼻はあれたおそへぬへあて下文の命婦が詞ふさむた霜河さにかひぬりこのあろ色あひや見えゆらむ寒き朝鼻の赤らむさま御はく志す歌は以空成のしと以る系に相照へく其あろるをえみえきこえたれむ多々良女の花は紅色あるあと著し河海抄のあし注は掻練は両面ふくさむり中重あし紅糸ありと志るされふくさむりあり掻練を練りたりと志るふ名よく色の事よはさてあらばおを蹴く伊勢貞丈主の委した考あり減紫ハ縫殿式は漆法も深紫紫草浅紫紫草小次深

○比古婆衣三

○咒

減紫綾一匹紫草八斤酢一升灰一石薪百二十斤中減
 紫綾一匹紫草八斤酢八合灰七斗薪九十斤浅減紫絲
 一絢紫草一斤灰一升薪三斤と云ては此の浅減紫に
 て絲とあるハ此を服色には用られざりあり無く
 さく又この減紫式の古本にペシムラサキと假字茂
 たり紫草は分量茂三等に減して浅く染る法ありむ
 薄紅に似たる色あるは多々良女の花よあらべ
 歌へる茂たえへばその花の色に似て浅たあはれし
 さを以へて其多々良女以のなるもの形ふりとあ
 ころよかりつゝ此比源順朝臣歌集は古本の寫
 をみるに此は富士谷成章が歌仙家田の條里は形に

歌四十五首茂廻らよむ浅く書とて形へられつる
 中の歌にをりくにおちふたる扇のうめあまむ茂
 一免どかひ花のよむやとみえたる但一單行の
 又は群書類徒五十五首茂あべて歌と一列又書り
 其を群書類徒五十五首茂あべて歌と一列又書り
 疊字を誤るの布あも多し又工の失り又三句うめあ
 れ今考ふるにおのたべはたらく免の急りたる小
 や紅梅はこと形ふ浅し此歌におちふるとちみぬへ
 て紅梅はこと形ふ浅し此歌におちふるとちみぬへ
 の香茂めでさる歌を和泉式部集小梅櫻の深うれ紅梅
 うさへおとありくふれあわの梅さてもいふがあり通
 うまはらめとふ草茂さるべともいふがあり通
 は下別例と辨ふべし其そは内膳式小みえさる多々

○比古婆衣三

○辛

良比賣も同物に之漬年料雜菜并條漬春菜料の中に
多々良比賣花搗三斗三斗鹽と載られたるあまの法
しさてその多々良比賣花やあるは紅梅の花よて搗
とはそ枝搗とりて鹽漬し奉法料の法し搗
とよむべし加つやち稲麦などの穂を連枷
撃ねとを葉莖より断る式なりにも普根搗
て和名抄本朝令云滑海藻阿良女俗用荒布未滑海に
藻加知女俗用搗布未搗其義也注され此多々良比
賣花のち搗とりたるふもて紅梅の布と注され此多々良比
錢子其歌女の本歌に得ふ子加と織子不波御子のり
与其歌女の本歌に得ふ子加と織子不波御子也難比

古曾見波也宇礼太左太乎加利古之加也得錢子也
多々良古支比也宇礼太左太乎加利古之加也得錢子也
えくあ太々良古支也太乎利己之加利古之加也得錢子也
扱くあ太々良古支也太乎利己之加利古之加也得錢子也
まへの藤をひぬせ依なる林の下の蔦かぎの太々良米を
ひてとのへるあ志のびてこく人ありときりせたま
れ枝もさへるあ志のびてこく人ありときりせたま
を鹽漬しして食の釘酒并肴などにをるあやありカ
氣ありて多々良のかりあゆふ其を漬て後尋コ
常花の白たをや黄むみゆく枝紅梅をわあるは
むとさる蒼のやを殊は紅たものあるがさゆあら
色あせびしていと美ウ麗きものある枝れゆに岐
踏民家より此ものをうるちやく調てそのかみ驛
賣るもむあし此製并遺をゆるちやく調てそのかみ

ありの中にわきて紅梅枝をのりて奉る例ありしに
 依てくまこ此梅むのりより字音モシゴエ小紅梅と呼てもて
 ちやい来れ系枝歌よみさへこをむい御饌ミケに奉るも
 かな然申さむをさほぐにいたあけまばさらにかま
 免うしく多々良比賣と申して奉りきさる枝やが
 て式も其名をて載られきりしものありはし然名
 たりけむ意を考得む志ひさねもへむ多々良と紅
 梅もひよせたるにむあらぬる但しあはらぬ
 らは今の俗に大嘗會の火桶元三の御薬温むるた
 たらはどは世の始り物ありしに冷泉院御時焼
 たりとあははり記せりたるられあり色葉字類抄
 火と鑑枝のハラ字よめり鑑と爐と同字あり字書に火

註と注せりさてたらの熾チみ色よ云々とれもちあ
 るこやの檜練紅き火色とむむあれさるは
 さくちかよふあち比賣とこの花は蒼のうは
 しくあまはあしよりてたへも志はし此を
 せ免て試にさる枝うちるせて紅梅の一名はご
 くに呼あともむりてきくらめともむ又き
 と急ツクてわわろとそありしなる法かくてれもへ
 む源氏君のかたさる免の花はごせ云々と歌を給
 へる後まこのの姫君はもせにれちしてかへるさ
 に二條院へ紫君はもとにれちし例の姫君は鼻の
 色よはけしあたまふれおせして立ひごふところ
 の詞にちしごくしれととの紅梅いとせくさく花小

て、以ろつきふけり、とれあねをあぞおやあくうと
まろく、梅の立枝はあつゝのしけれど、いで唇とあひあ
くうちうめあれぬふ、とえたるも、さきにたくらめ
の花の色と歌ひたすひしふ、この紅梅をうて歌よみ
志ぬへ系趣の、むぐたあひくぞたゆるか、○そへ
て云、新撰字鏡、華、所巾、反、長也、衆也、姓也、號也、聚也、多
多良女、とえたるもの、あゝにあげつらへ系たくら
めのおやめ、はくたもたるまど、件、字注、を他義あ
れむ、其ものさねを考ふ、はき由なし、この字鏡、今あべ
書、茂、抄、書、き、系、もの、よて、字注と訓と合、ぐと、き、が、多、く、
又、他、字、の、訓、は、鑑、入、を、系、と、あり、近、ら、る、原、書、は、關、本、世

ふ出たれど、此華字の在べき部、正字通に、華草生、山澤、
を、あ、を、缺、を、れ、む、正、し、が、こ、し、
如、蒲、黄、葉、如、芥、と、え、た、れ、ど、何、あ、る、草、と、も、知、か、こ、く、
花、状、た、ら、免、ふ、を、さ、ら、に、合、ち、び、り、く、は、細、卒、の、事、
あ、ら、む、の、と、考、ふ、る、に、古、今、と、も、小、然、系、名、き、こ、え、び、又、
菜、と、し、て、食、ふ、べ、き、と、の、よ、も、あ、ら、び、又、玉、小、櫛、よ、い、を、
れ、と、あ、た、く、ら、べ、と、い、ふ、も、の、い、の、あ、る、もの、よ、の、知、ら
ぬ、れ、乃、れ、さ、た、小、多、々、良、女、を、た、づ、ぬ、と、て、本、草、の、道、に
と、を、し、た、人、々、に、を、い、ね、問、ひ、を、る、に、本、草、毒、草、部、よ、載、
た、る、石、龍、芮、本草和名に之、乃、比、多、、
國、の、方、言、く、さ、ぐ、あ、る、中、に、夕、ハ、ラ、メ、夕、ハ、ラ、ベ、夕、ハ、

ナベタ、ベタ、ラビタ、ロベタ、ライ、あどやりど
 子にひるり、ひげれ本、名あるより知らぬ、此方言の
ラメ、タ、ベ、ト、モ、イ、ウ、ク、本、考、た、ら、め、た、此、の
た、相、通、ち、し、て、呼、ぶ、考、の、傍、證、と、は、を、修、き、心、此、の
 秋冬より、溝瀆ミナトあると水田コナタなどの中に生、出て、二三月は
 頃五瓣ヒラの黄花開くものあり、まゝと湿草部よりえたる
 鱧腸本、草、和、名、也、茂もタ、ラビ、といふ所あり、此を春
宇、末、岐、多、之、
 末笈初つものに生、出て、笈のあむ枝、項ぐとに、白蛇
 碎コ、カ辨カある花さくものあり、これら茂れきてを、似かよ
 ひとゑ名、木草茂らばといへり、た、この二種、花色
 ありらば、と食料とすべきを、のふあらざれむ、本

考はあげつらへる多々良比賣ふも、多々良女も何
 らざらふあと明あり
 ○まゝと云、かのたくら先の花は、おと云々と、いふに、
 らねて、三笠山のをとめをむすて、と歌むるへ、
 は、あのたくら免とは、別ある風俗の歌ある、茂、とり、
 へ、まゝと云、いへる、命婦が御法、と、あま歌
 と、い、ゆる、い、あ、の、他ホカの歌、茂、も、と、り、何、を、を、へ、
 へり、と、た、こ、也、つ、あ、り、歌、と、を、一、二、句、け、き、り、
い、よ、て、幕、木、卷、に、蔭、も、よ、う、あ、ど、は、り、う、と、ふ、わ、ど
に、空、の、へ、る、も、催、馬、樂、の、飛、鳥、井、の、蔭、も、よ、う、と、ふ、わ、ど
その、わ、の、あ、ま、と、り、ま、ま、と、へ、く、歌、を、る、間、に、と、い、ふ、意、あ
る、修、し、さ、て、此、は、い、ま、あ、と、い、ふ、言、は、意、ハ、別、と、い、ふ、意、あ

○比古婆衣三

五五止

へり論さるるをどその本歌はひまご考得ば然うさひ
ゆへふ意残れしものゆゑ三笠の山に残と免とは常
陸宮の姫君に隠語カクシゴトにとりゆへふあり其を春日明神
はもと常陸國よりふり奉りて大和に三笠山に祭イハを
志めたるをむの書のども小見えをねむ本歌に
詞小その意残うつしかの姫君をいとひぬへる下
心残ふく免てたをふれぬへ趣あるはし

比古婆衣三の巻終

